

NUAL (ニューアル) は Nagoya University Alumni Association の略称です。



Contents

名大今昔

Nagoya University: Past and Present 1

同窓会ニュース 5

NUAL News

大学ニュース 14

Nagoya University News

事務局からのお知らせ 16

From the NUAL Office

(左) 昼食時混雑する昭和40年頃の教養食堂(東山地区)。現在は、全学教育棟のロビーとカフェ・プランゾになっている(写真提供:名大生協)

(右上) 現在の新しい食堂の一つであるIBカフェ(IB電子情報館1階、旧工学部1号館)。夜9時まで営業し、生ビールなど各種アルコールやおつまみもある。

(右下) 旧理系中華食堂跡に建設された最新の建物フロンテ(カフェと書店)

特集 名大今昔 Nagoya University: Past and Present

第2回 食堂 -その1- Dining Hall -Part 1-

本特集は名古屋大学の学生に関わり深い建物やイベントなどについて、各世代の同窓生による回想をもとに、名古屋大学の歴史を紹介する特集コーナーです。

第2回は名古屋大学の食堂です。食堂は店舗数が多く、歴史も長いので、今回は昭和20~30年代の食堂を紹介します。

This special feature introduces the history of Nagoya University through buildings and events closely associated with students' lives. The feature focuses on the recollections of alumni spanning various generations. The second issue reports on the "dining hall" in Nagoya University. This issue introduces several dining halls between 1950 and 1965, because there were, and are, too many dining halls to introduce at once.

教養部瑞穂分校学生食堂と服部さんご夫妻のこと

堀田 繁治 (昭和28年法学部卒)



堀田 繁治
昭和28年法学部卒業。同年中部電力株式会社入社。昭和37年東邦石油株式会社入社後、同社常務取締役、常勤監査役、顧問などを歴任。

学生食堂（次頁の昭和25年版学生便覧参照）の委員を務めたのは、確か昭和25年から26年にかけてのことだったと思う。半世紀以上も前のことであり、記憶も定かでないし、記録として残されているものは全くない。しかし人間の回想とか追憶といったもの、つまり遠い過去にさかのぼり、埋もれていたものを掘りおこそうとあれこれ思いを巡らせていると、時として過去のある時期の事柄が、実にはっきりと蘇り、その時代の状況や人々の表情、音声までもが、次々と生々しく思い出されたりすることがあるものだ。

当時の学生生活は、今の人達には想像もできないほど貧しかった。着るものも食べるものもすむところも耐乏的な貧困の中にあった。国そのものが、敗戦後の窮乏に喘いでいたからだ。そんな中でも、学生たちの多くは自由、独立、解放といった新しい価値基準をより確かなものにしようと、学生による自治活動に奔走していた。学生食堂の自主化的運営も、そのような風潮の一つであり、その活動に参加することに、何か崇高な実践的意義があるかのように喧伝されていた。

私は、そのような風潮に必ずしも与することができなかった。だけど、食堂委員になると、朝昼夜の三食がタダになると聞いて、二つ返事で委員を引き受けた。学生による自主管理と

はいっても、その仕事の内容は、食券の販売による入金、食材、食器の購入による出金、賄いさんへの給料の支払いといった日常の出納管理が主体であり、当時の東海銀行滝子支店にあった学生自治会名義の預金口座と、毎日のわずかな現金残高からみると誠に不相応な堅牢かつ大型の金庫の保管が、食堂委員である私の主たる担当であった。この他に「今日の実践目標」「自治活動における学食の役割」などといったテーマで、定例的なミーティングが開かれていたように思う。しかし、殆ど記憶がない。

ところで、学食に関するこの小文を書くよう要請されたとき、私の回想、追憶の中で、何よりも誰よりもヴィヴィッドに登場してきたのは、前記の賄いさんご夫婦、つまり服部茂さんと奥方の幸枝さんであった。ご夫妻は、食堂ホールの裏側の粗末な居室に、利発な男の子と可愛い2人の幼女と一緒に住み込んでおられた。多分三十歳代半ばだったはずだ。

殺風景な食堂ホールの中での実直そのものご主人の働きぶり、色白で小柄な美形の奥さんのサポートぶりは、誠に清々しく感じられたものだ。ともすれば、気位だけがなくて幼さを脱し切れていないような学生たちも、この賄いさんファミリーには親しみを感じ、行為をもって接しているようであった。食堂の金庫のキーを紛失して献立の食材費を支給できなかったり、銀行から出金するのを失念して、ご夫婦への給料が支払えず、迷惑や不便をかけた失敗談もあったが、そんなときでも、服部さんご夫婦は笑顔を絶やすことなく、食堂委員を心底から信頼してくれていた。

私どもの卒業（昭和28年）後、いつの頃か学食は閉鎖され、服部さん方は、瑞穂区桜山に「伊勢屋」という名の食事処を開かれた。学生時代の仲間の多くは、この伊勢屋に出入りして、ご夫妻に何かとお世話になったようである。

今回、名大同窓会から学食についての出稿要請を受けた「一月会」という仲間の会（昭和28年前後に卒業した各学部のOB30数名で構成、年一度の旅行と懇親を続けている）は、服部さんの「伊勢屋」時代に誕生したものと思う。私が一月会に参加したのは、ずっと後年で平成6年5月に横浜で開かれた「相州一月会」からであった。この時、40数年振りに再会した学友たちのことを書いた一文の中に、服部さん

〈名古屋大学の食堂の変遷〉

食堂名	年	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
学生会館				5					生協						
中央			生協	4		業者									
第一								3							
第二		22.11													
		30.2業者		生協	8										
		34.4生協													
文科系					5				生協						
南															
南															
理															
新															
教															
養(東山)					4業者	5			生協						
ク(滝子)															
医															
学															
部		31.11生協													
農															
学															
部															
鳴															
翠(桜山)															
ク(山手)															
名															
城		23.4													
		業者													

名古屋大学の食堂の変遷（生協20周年記念誌より）。本号で扱う食堂は、第一、第二、教養（東山）、教養（滝子）の各食堂である。

ご夫妻について次のように懐かしく回想しているので、その部分を紹介して本稿をとじることにしたい。

「ややもすれば、身勝手に不作法になりがちな学生たちを相手に、一言の愚痴もこぼさず、いつも笑顔で働いておられた学生食堂の服部さんご夫妻が、この一月会の名誉会員だという。何とも気の利いた嬉しい計らいではないか。そしてご夫妻の変わらぬ若々しさと正確無比の記憶力には、心底、

驚かされた。81歳になろうという服部さんの血色の良さはどうだ。それにひんの良い奥さんには、風雅な趣すら感じられる。お孫さんは7人いるという。おそらく、この日の参加者の中で、ご夫妻こそが、過去における空白の時間のもっとも少ない、つまり、もっとも充実した豊かな過去を保有しておられたにちがいない」。

黒いパン

飯田 忠三（昭和26年理学部卒）

飯田 忠三

昭和26年理学部卒業。昭和37年名古屋大学理学部助教授。昭和43年名古屋工業大学教授。平成2年定年退職。名古屋工業大学名誉教授。



昭和23年（1948年）5月頃、学生食堂は現在の生協の場所にあった（これは東山第一食堂のことで、現在の北部厚生会館付近にあった。下の昭和25年版学生便覧参照。広報委員会追記）。木造平屋で、50名程度しか入れぬ小さな食堂であった。丸顔で小柄な浅野さんと、若い頃の美人の面影を残す奥さんと、2人でこの食堂を運営していた。従業員として、ひな子という小柄で元気な娘と、小太りで丸顔の22~3才と思われる女性と、おとらばあさんと呼んでいた中年のおばちゃんが働いていた。皆、朗らかで親切だった。

当時、配給だけでは、質、量、共に、食堂として食事を

賄うことは、到底、できない状態であったが、浅野夫妻と関係者の食料調達や代用食の考察などの大変な努力によって、なんとか3食共、間に合ったようである。

さて、食べ物に無頓着な私が閉口した物がある。昼のパンである。パンと言っても外観は黒ずんだ堅めのコロケみたいなものである。1口食べると甘い味がするが、すぐ、苦みが口中に広がり、2口目を食べる気がなくなるという代物。物理3奇人の1人で、食いしん坊の小比木君（中学も同級）も食べなかった。当時、ある家の10畳の別棟に、この小比木君と化学同級の小林さんと3人で下宿していた。3人が2コずつ持ち帰ったパンを部屋の隅に捨てるので、1週間も経つと山になる。日曜日に、それを肥料と称して、裏の田んぼに、そっと捨てたものである。あの甘くて苦いのは、さつま芋のつるをそのまま粉にしたので、あくのためであろうと、うわさをしていた。このパンは間もなく姿を消したが、とに角、生まれてこの方、あの様に食べる気のしなかったものははない。

黒いパンはさておき、この食堂は、当時、気軽に行ける憩いの場でもあった。とくに、遠方から来た孤独な学生にとって、他の学生と友達になって、楽しく談笑できる場を提供していたことは確かである。

瑞穂分校	理学部	工学部	医学部	経済学部
瑞穂区瑞穂町内	千種区不老町内	熱田区大野町内	昭和区錦舞町内	瑞穂区瑞穂町内
学生食堂、茶室、学生会館、校務の診察あり	東山学生食堂、一ヶ月一約五〇名	工学部学生食堂、放射線力約一〇〇名	共済調理場、外食券一日六〇圓	寮内学生会館、学生会館、学生会館
使用の際は最も敬請学生掛に願出	委員会に申込む	申込は工学部敬請学生掛		

1950年頃の厚生施設（昭和25年版学生便覧より）。理学部の東山学生食堂が第一食堂、瑞穂分校の施設が教養（滝子）の食堂にあたる。

歴史の目撃者にインタビュー

名古屋大学の食堂を関係者として見てこられた元名古屋大学生協職員の森川まさ子さんに、教養（東山）食堂があった頃について、お話をお聞きました。

広報 ここに教養食堂の昼の混雑時の写真（表紙左写真）がありますが、これはどこですか。

森川 現在の全学教育棟の玄関の左側、カフェ・プランゾがあるところ、ちょっと前ではマクドナルドがあったところですよ。

広報 このころの様子についてお聞かせください。

森川 私は生協に就職した時から退職まで、ずっと書籍部一筋で、昼食時の休憩も混雑時をはずして交代で行うので、実は昼食時の混雑の様子はわからないんですよ。でもね、12時から一斉に2000人くらいの学生さんが昼食をとるので大変な行列だったそうです。このように混雑がひどいということから、南部食堂の建設要求がでたんですよ。

広報 よほど大変だったのでしょうか。

森川 教養食堂は当初、大岩さんという方が業者として経営していたんです。昭和38年から1年ほど。その後生協が経営するようになったんです。当時、生協は経営が苦しくて、人件費削減で人手不足でした。そこで教養食堂の一角で、パン・ミルクコーナーという完全セルフのコーナーを作ったんです。

広報 道ばたの野菜無人販売みたいなものですか。

森川 そうです。でもね、用意した商品の総額と料金箱の中の金額はいつもピッタシ合っていたと聞きました。信頼関係がしっかりとできていて、いい時代でしたよね。それから、私は書籍部だったんですが、夕方、食器洗いの人手が足らなくなると、よく食器洗いの手伝いをしていました。とにかく人手が足らなかったんです。でも、教養食堂ができて、だんだんと生協の経営が良くなっていったですよ。私が生協に就職した頃からですよ。

広報 救世主じゃないですか。

森川 みんな一丸となって黒字経営にするためにがんばりました。

広報 他の食堂で何かエピソードがありますか。

森川 私が就職する前で聞いた話ですが、生協で3番目の店舗だった東山第二食堂というのが、現在の郵便局

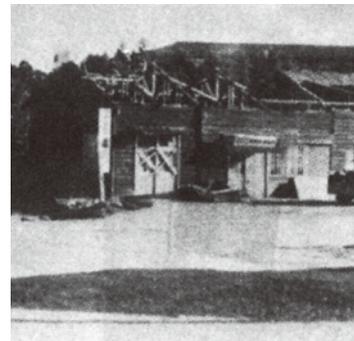
と工学部4号館の間あたりにあって、この建物は東山唯一の総合店舗だったんです。それが昭和34年の伊勢湾台風の時、屋根が吹き飛んだんです。その時全国の大学生協から多額のカンパ（223,588円）が寄せられ、復旧活動に大きな力となったんですよ。生協の組織ってね、こういう時すごい力を発揮するんですよ…。

（生協のことについては、次から次へと興味深いお話が出てきて、もっと時間があればと思いつつ、インタビューを終えました）

広報 今日は本当にありがとうございました。

森川まさ子さん

名古屋大学生協元職員。一貫して書籍部に在籍し、各教員への書籍の配本等を行ってこられました。そのため、大学内では最も多くの教員の専門分野を知っている方ではないかと思われます。また知的探求心の旺盛な方で、多くの方との会話や豊富な書籍から広範な知識の持ち主でもあります。（広報）



屋根が吹き飛んだ第二食堂
1959年（昭和34年）の伊勢湾台風で屋根が吹き飛んだ第二食堂（写真提供、名古屋大生協）



1964年に生協に移管された教養食堂は、大変な混雑でお盆を持って外で食事をする学生も続出。

支部・部局便り News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。伝統ある同窓会も、新たに設立される同窓会もありますが、それぞれが全学同窓会とも連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

関東支部 NUAL Kanto Branch



関東支部は、3年前に設立されて以来、原則として毎月幹事会を開催し、幹事間と大学関係者との話し合いを行って、名大の行事開催に協力してまいりました。昨年のホームカミングデイにも、東京から名古屋へ幹事が参加しました(写真)。

本年4月に、担当副総長の異動を機に、昨年来発足しているワーキンググループの活動経緯をまとめて、佐分副総長、宮田産学連携本部長・副総長など大学関係者のご出席を得て、活動経緯をまとめて報告し、提言を行いました。6月の幹事会では、提言の具体化について、実現の可否、方法の具体的検討に入っています。

2006年のスケジュール

法人化後の名大における関東支部の役割と位置づけを明確にしていくことが第一と考えています。関東支部には、名大・全学同窓会・中部 TLO・名大協力が一体となって、名大が研究・教育・社会貢献をしていくための東京の拠点としての使命があると幹事一同認識しています。この協議を行いつつ、下記の行事への協力支援活動を行っていきたいと思っています。

- ① 第二回ホームカミングデイへの参加
- ② 第四回東京フォーラム
- ③ 名大での講演会開催などに講師派遣

(事務局長 片岡大造)

関西支部 NUAL Kansai Branch



第2回関西支部総会 懇親会の様子

名古屋大学全学同窓会関西支部は、平成16年11月の関西フォーラムに併せて設立総会を開きました。支部の会員は約4,500人で、支部長は笈哲男氏(工応化 S33卒:三洋化成工業株)です。関西フォーラムには本学の卒業生など約500人が参加し、赤崎勇名誉教授の基調講演(コバルトブルーに魅せられて)に続き大学の先端研究紹介があり、その後、交流会が開かれました。

また、本年、2月18日には、平野総長、伊藤代表幹事にも出席していただき第2回総会を開催しました。約80名が参加し、総会では支部活動報告、総長挨拶に続き、伊藤代表幹事からは全学同窓会の活動報告を、日銀京都支店長、市原好二氏(法 S53卒)には、「2006年経済の期待と注目点」と題する講演をして頂きました。懇親会では、学部、学科、世代を越えて交流の輪が広がりました。関西支部は、今後、全学同窓会本部、関東支部、遠州会などと連携しながら活動していきます。関西に在住の同窓生のご参加をお待ちしております。

(事務局長 鳥居 剛)

名古屋大学遠州会 NUAL Ensyu Branch

名古屋大学遠州会は静岡県西部の名大全学同窓会として平成8年に発足しました。

今年は発足以来10周年の節目の年になり、去る6月3日(土)18時よりグランドホテル浜松にて第6回総会と11回目の懇親会を開催しました。

会員76人の出席と伊藤全学同窓会代表幹事にも出席頂きました。

総会では発足より10年間会長を務められた大久保忠訓氏が名誉会長に推挙され、乾昇副会長(昭和23年工学

部卒)が新会長に選出されました。

伊藤代表幹事からは海外支部の発足や今年のホームカミングデー、更に名大基金の構想の話があり、会員の山崎昇前浜松医大学長からは、今春の叙勲で瑞宝重光章を授与された報告のスピーチがありました。

懇親会のアトラクションでは静岡文化芸術大学の吹奏楽団から選抜結成されたSWEジャズバンドが出演し、女子学生中心の若さ溢れるジャズ演奏が会を盛り上げました。総会等で時間がずれ込み懇親の時間が短くなり、やや名残惜しいまま閉会となりました。

6月28日に18年度第1回役員会を開き、次年度に向けて、若い会員特に女性の出席を増やし、会がより活性化する様な企画を検討することになりました。

全学同窓会に繋がる遠州地域の身近な交流の場です。遠州地区に在住または在勤の名大卒業生の参加をお待ちしております。

なお、来年度の懇親会は5月26日(土)を予定しておりますが、詳細は来年3月中旬頃決定します。

■連絡先 TEL/FAX : 053-425-0991

E-mail : hi-uchi@po3.across.or.jp

事務局 内山まで

文学部・文学研究科同窓会 Letters



あおぎり植樹

4月21日、文学部・文学研究科同窓会によって、文学研究科棟南側中庭にあおぎりが10本植樹されました。今年3月4日の同窓会総会において、来たる文学部60周年に向けて記念として植樹をすることが決定され、それを受けて行われたものです。写真は当日の植樹の様子です。あおぎりは、名古屋城跡にキャンパスがあった頃、旧兵舎を改造した文学部棟の前に数本植わっていた木で、いつの頃からかそれが文学部生のシンボルとなっていったようです。梅雨もそろそろ終わろうという現在は、10本とも葉が生い茂り、立派な樹木となっております。今後、文学部・文学研究科の発展を、同窓生とともに永く見守ってくれることでしょう。

医学部医学科 Medicine

名古屋大学医学部学友会は「学友時報」を毎月発行

すると共に、毎年学友大会を開催しています。昨年の学友大会は10月15日(土)に名古屋観光ホテルで開催され、250名が参加しました。記念講演として橋木俊昭先生に「日本経済の進路について」という題名でお話頂きました。平成18年度は10月21日(土)に山本容子先生に「私の美術遊園地 -版画の扉を開いて-」という題名でご講演を頂きます。平成17年度は10支部にて支部総会が開催されました。

■連絡先 〒464-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65

名古屋大学医学部学友会

TEL : 052-744-2512

工学部・工学研究科 Engineering

工学部・工学研究科同窓会では、いままで4年毎に同窓生名簿の発行を行ってきました。しかし、平成17年4月からの個人情報保護法施行により、会員数2万人を数える本同窓会も個人情報保護法の対象団体となりました。名簿発行につきまして検討してまいりましたが、残念ながら、現体制では、個人情報保護法に沿った形での同窓会名簿の発行は難しく見送らざるを得ない状況にあるとの結論に達しました。今年度の本同窓会評議員会に会員名簿発行の中止を諮り、認められました。あわせて、本会会則の変更を決定しております。今後は、本同窓会と各学科同窓会との連携を強め、工学部・工学研究科発展のために努めてまいります。

事業活動等の詳細につきましては、工学部・工学研究科同窓会ホームページをご覧ください。

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/engg/index.html>

なお、9月30日のホームカミングデーでは、「名大の工学研究 いま、そして、みらい」と題して、三矢保永教授・浅井滋生教授に講師をお願いして講演会を開催します。

■連絡先 E-mail : okano@esi.nagoya-u.ac.jp

農学部同窓会(セコイア会) Agriculture (Sequoia-kai)



名古屋大学
農学部同窓会
セコイア会



平成18年6月3日(土)に名古屋大学農学部において総会を行いました。例年通り、平成17年度の事業・決算報告、平成18年度の役員選出と事業計画・予算を審議した後に、今年は「卒業生からの発言」と題し、旧畜産学

科卒の山本典子さんから、“同窓会員同士の連携の重要性”についてプレゼンして頂きました。今後も卒業生の方々には積極的にご発言して頂く場を設け、より活気のある総会にしていければと考えています。また瓜谷郁三名誉教授より、現在、名古屋大学農学部跡地への記念碑建設の計画が進められているとのお知らせがありました。農学部は名古屋大学最後の学部として昭和26年に安城市に創設されましたが、各学部の集結が総合大学の実をあげる上で望ましいという要請により、昭和41年に東山キャンパスへと移転しました。今回の記念碑建設は農学部の創設と発展を記念するものであるため、農学部同窓会としても協力して進めて行きたいと考えています。

総会終了後には松本博紀氏（農林水産省生産局畜産部畜産振興課）による講演「BSEの発生と動物性副産物のリサイクルについて」を開催しました。こちらも皆さんの関心の高い話題であり、最終的には総会と併せて30分以上も時間を超過する結果となりました。来年度以降はもう少し時間に余裕を持ち、ゆっくり意見・情報交換ができるよう配慮したいと思います。講演会終了後、シンポジウム内“ユニバーサルクラブ”にて懇親会を開催し親睦を深めました。本年度は、第15回、並びに第25回卒業生の同期会も併せて開催されたこともあり、非常に多くの同窓生の方々に参加して頂き、大変にぎやかな懇親会となりました。

課題としては、今年も昨年度に引き続き第2回卒業生の「卒業50周年記念祝賀会」を農学部談話会にもご協力頂き開催しましたが、残念ながら主役の方々の参加数が前回に比べ減少してしまいました。思い起こせば同窓会懇親会の参加人数も以前は少なかったのですが、上述のように現在は多くの方々に参加頂けるようになっていきますので、祝賀会についても開催の仕方を工夫し、より良い会にしていけるように心がけたいと思います。

祝賀会、講演会、懇親会の模様、また記念碑建設に関する情報などは農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) に掲載中です。是非ご覧下さい。

■連絡先 E-mail : dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp

国際開発研究科 International Development

2000年の設立以来6年を数える同窓会ですが、去年は総会を開催しなかったため、今回のホームカミングデイは2年ぶりに会員が集う機会となります。今年の総会では、創立から連続して携わってきた役員の交替など、今後の運営方針に関する重要な議題を話し合います。また、出勤されている教職員の参加も得て、にぎやかな懇親会にしたいと考えています。多数のご来場をお待ちしております。

URL : <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/alumni/index-jp.html>

■連絡先 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科同窓会事務局
E-mail : alumni@gsid.nagoya-u.ac.jp

多元数理科学研究科 Mathematics



2006年6月3日に名古屋大学数理科学同窓会を設立致しました。

これまで大学院多元数理科学研究科の同窓会はございませんでしたが、同窓生の協力の下に理学部数理学科・大学院多元数理科学研究科の同窓生名簿の作成、高校生対象の公開講座の開催、学生の就職支援のための企業研究セミナーおよびミニ同窓会の開催などの実質的な同窓会活動を行って参りました。この度、数理科学同窓会を正式に発足させ、よりいっそう充実した交流の場にしていくことと致しました。同日、59名の同窓生の参加のもと、同窓会設立総会、樋口清司氏（昭和44卒業生、宇宙航空研究開発機構理事）による講演会ならびに懇親会を行い、おおいに盛り上がりました。

9月30日に行われます今年度の名古屋大学ホームカミングデイにおきましても、同窓会と共催の行事を計画しておりますので御参加下さい。

■連絡先 名古屋大学大学院多元数理科学研究科内
名古屋大学数理科学同窓会
E-mail: dousou@math.nagoya-u.ac.jp
TEL : 052-789-2833
FAX : 052-789-539

情報文化学部・人間情報学研究科 Informatics and Sciences

平成15年末に発足し、早3年目を迎えました情報文化学部・人間情報学研究科同窓会は、この度 Web ページを開設することになりました。同窓会に関連する行事や同窓会入会手続きなどについての情報を随時提供しておりますので、ぜひご利用ください。

URL : <http://www.sis.nagoya-u.ac.jp/alumni/>

■連絡先 E-mail : alumni@sis.nagoya-u.ac.jp

同窓会支援事業 NUAL Support Project

全学同窓会では、全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生支援、就職支援事業、本部・部局による行事・寄附講義等）への支援を目的として、平成16（2004）年度より、公募型の大学支援事業を開始しました。この事業は年2回募集を行い、選考にあたっては選考委員会を組織し、厳正に行っております。平成18年度前期採択事業4件について、担当者より報告いただきました。

NUAL commenced an open invitation type support project from 2004 for Nagoya University's activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association. This project extends invitation twice a year and the Selection Committee is organized to implement a strict selection of activities. The following are summaries of the four activities selected in the first period of 2006.

リユース市 Reuse Market

申請代表者：小林健嗣
(リユース市実行委員会 農学部資源生物環境学2年)

名古屋大学下宿用品リユース市は、卒業する下宿生の方から不要となった家具・家電などを譲っていただき、それをもう一度使ってもらおうべく新生らに提供するイベントです。粗大ごみやその不法投棄の減少、新生生の経済的負担軽減を目的に1995年に始められたリユース市は、今回で11回目を迎えることができました。これも多くの卒業生や新生、全学同窓会を始めとする学内関係者の方々のご支援あってのものとスタッフ一同深謝しております。

今年は電気用品安全法（通称 PSE 法）の影響を受けたりするなどの問題もありましたが、無事4月4日に開催することができました。物品数も去年に比べ100品程多い422品が集まり、会場となった第一体育館は下宿用品を求める参加者で賑わいました。

地球環境問題が深刻化している現在、地域レベルで行える活動としてリユース市は非常に有効であると私達は考えています。中部地区の他の大学でも新たにリユース市を始める所が出てきており、彼らと連携してリユース市のさらなる発展と普及に努めていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願ひ致します。



お目当ての品を探す学生たち

名大祭 Nagoya University Festival

申請代表者：栗本直樹
(名大祭本部実行委員会委員長 農学部応用生物科学科2年)

名大祭は47年の歴史をもつ伝統ある祭典です。毎年多くの方にご来場いただき、東海地区でも最大級の大学祭と言えます。この名大祭開催に当たり、全学同窓会から運営費の一部を支援していただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

さて、今回の第47回名大祭は6月1日から4日にかけて東山キャンパスにて開催されました。全日晴天と、天候にも恵まれ、『名大生の参加の下』という良き伝統を踏襲し、例年以上の盛り上がりを見せました。名大生以外にも大学周辺にお住まいの方にも名大祭に参加していただこうと、今回の名大祭では「盆踊り」を開催しました。6月の盆踊りと少し時期が早い気もしますが、会場となった第3グリーンベルトは浴衣を着た子供、学生、年配の方でいっぱいとなり、地域住民の方からも大学生からも好評でした。よく「名大祭は学生向けの催しが多い」という言葉を耳にしますが、そのようなことはありません。名大祭では、今回の盆踊りを始めとして、子供や年配の方、もちろん同窓生の方にも楽しんでいただけるような催しが多く行われています。今回の名大祭に参加されなかった同窓生の方もこの場を機会に母校を訪ねてみてはいかがでしょうか？



第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走10/9(日) 18th Izumo All Japan University Ekiden

申請代表者：山村彰紀
(陸上部 物理工学科 応用物理学コース専攻2年)

私たち名古屋大学陸上競技部は、昨年12月4日に行われた第67回東海学生駅伝において、名古屋大学として初となる優勝を飾り、出雲駅伝への出場権を得ました。出雲駅伝は来る10月9日に、大学3大駅伝の開幕戦として、出雲大社をスタート、出雲ドームをゴールとする6区間44.0kmで争われ、全国から強豪校が集う駅伝です。

この駅伝までの取り組みとしては、まず7月末に全国七大学対校陸上競技大会があり、8月には恒例の夏合宿でじっくりと走り込みます。そして9月23日に出雲駅伝とともに大学3大駅伝のひとつである全日本大学駅伝の東海地区予選会があり、駅伝シーズンが始まります。この予選会が出雲駅伝への良い試金石になるので、ぜひとも勝ち抜いて出雲駅伝にいい形でつなげたいと思っています。

出雲駅伝は相手も強く苦戦が予想されますが、自分たちの力を100%発揮できるよう、1日1日を大切に、本番では悔いのない走りをしたいと思います。当日はフジテレビ系列で全国生中継もされます。母校のタスキを胸に選手は全力でぶつかっていきますので、応援よろしく願いいたします。



大会に向け練習に励む部員たち

名古屋大学短期留学受入れプログラム (NUPACE) 設立10周年記念シンポジウムとNUPACE・交換留 学同窓会

The 10th NUPACE Anniversary & Alumni Reunion

申請代表者：野水 勉 (留学生センター教授)

半年ないし1年間の短期間滞在する新しい留学受入れプログラムとして、「名古屋大学短期留学受入れプログラム (NUPACE)」が平成8年に設立されて以来10年が経過し、同プログラムの卒業生は500名を越えました。10周年を機会に、来る10月26～27日に、同プログラムの設立に関わった国内関係者、海外の協定大学関係者、NUPACE 参加者、そして名古屋大学から協定大学に派遣された交換留学経験者が一同に会して、シンポジウムを開催し、合わせてNUPACE・交換留学同窓会を発足させます。

26日に行われるシンポジウムの第1部では、本学との50名を越える多数の交換留学実現の立役者であるノースカロライナ州立大学ジャパンセンター・センター長 Tony Moyer 氏、日仏間の学生交流 Program 8の推進役であった日仏学生交流会館館長 Daniele Alexandre 氏、その他の国内外の関係者を招聘して、短期留学プログラムの成果を総括し、今後の課題と展望を討議します。第2部では、NUPACEの卒業生や交換留学を経験した名古屋大学卒業生が参加して、短期留学の経験とその後の国際社会での活躍、ネットワークを紹介し、展望を語ってもらいます。2日目は、同窓会発足とその関連行事を計画しています。



NUPACE 2005 Winter Party (留学生センターにて)

活躍する会員たち NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓会会員の各界におけるご活躍ぶりを紹介しています。第4回目は、工学部卒業ながら中日新聞運動部記者として活躍されている石原泰智さんと、行政現場で自然保護に関わってこられた寺本和子さんにご寄稿いただきました。

This column “NUAL People in Action” features our alumni playing active roles in various fields. In this forth issue, we have articles contributed by Mr. Ishihara Yasutomo, who is a sports reporter with Chunichi Shinbun even though he graduated from the School of Engineering, and by Ms. Teramoto Kazuko who has been working for the protection of the environment as a governmental official.



大関琴欧州を取材する筆者（右）

石原泰智さん

1971年9月、愛知県蟹江町生まれ。91年工学部応用化学科入学。途中、大手予備校河合塾の大検コース「コスモ」、名古屋市内の出版社「風媒社」の営業アルバイトなどを経験。97年に復学し、99年に8年かかって応用化学科を卒業。同年春に中日新聞社に入社。長野県伊那通信局勤務を経て、現在は名古屋本社編集局運動部でゴルフ、アマチュア競技を担当。
(E-mail isihar.h@chunichi.co.jp)

34歳の若輩者に語るものなどありません。人の倍の年数をかかって卒業した大学には思い入れはあります。披露できるとすれば、新聞社での仕事内容と文章を書こうと志したきっかけでしょうか。思うままに記してみます。

1999年春に工学部応用化学科を卒業し、原口研究室での卒業研究は産業廃棄物である焼却灰の分析でした。その年の春に27歳で名古屋市の中日新聞社に入社。専門とかけ離れて、現在は名古屋本社編集局運動部でスポーツ記者をしています。100キロを優に超える体重が見込まれ、2004年から2年間、主に大相撲担当をしていました。「飲む、打つ、買う」が常態化したプロスポーツ界は、象牙の塔たる大学とは対極に位置します。学歴などは逆に邪魔な世界。彼らに信頼されるかどうかは、選手の意図した動きやプレーを理解して質問をぶつけるか。あとは、記者が選手にとって、公私両面で一番の良き理解者であり得るか、でした。

夜中にいかがわしい店に呼び出されて、酒をイッキ飲みさせられることもありました。試合に負けた腹いせにYシャツをビリビリに破かれたことも。家に帰ると、3年前に結婚した同僚でもあるカミサンに「何でこうなるの？」とあきれられることもしばしば。しかし「取材対象と友達た

り得よう」と常に思う私にとって、それは必然の成り行きでした。

17歳で文章を書く仕事に就こうと決めていました。父が名古屋大大学院医学研究科にいたこともあり、家族から「医学部を受けろよ」という無言のプレッシャーが幼い頃からありました。元来は社会や国語の好きな「文系人間」だったので、理系の勉強はつらかったです。愛知・南山高を卒業後、予備校の河合塾で1浪して名古屋大医学部の受験を目指しましたが、センター試験の点数が足りずに断念。工学部応用化学科を受験しました。医学部受験に失敗して、工学部や理学部に來ている学生は多くいました（笑）

大学1年目を終えた時、「このまま大学内で学生をしていても何も書くに値する^{あた}ような経験はできない」と勝手に思い込みました。その時は卒業よりも「底っぺたを這いずって生きている人間を描くには、何をしたらいいか」なんて、変なことばかり考えていました。

世はバブル時代の終焉期。家庭教師のような時給の高いバイトには見向きもせず、ペンキ塗りや飲食店の掃除、引っ越しなど肉体労働ばかりしていました。そこに集う人たちは、偏差値で測る頭という意味では、あまり良く

なかったと思います。人生の挫折を経て、それを克服し、派手な生活などはしませんが、心温かく仲間を助けるという人間に出会いました。

大学2年目の92年から2年間、河合塾の大検コースでアルバイトスタッフをしました。講師らは全国を飛び回っているので、高校中退生のクラス担任のような仕事です。わたしは主に不良生徒の担当で、未成年の塾生に「自己責任」と称して酒を飲み、カラオケを歌わして本音を聞き出していました。「中退」というレッテルを貼られ、家族や社会からダメ出しをされた生徒が、再び自らの足で一般社会に踏み出すまでの手助けをする。「あなた達は間違っていない。高校を辞めた勇気ある選択をしてきた若者だ。一緒に何がしたいか、考えよう」と励まし続けていました。

生徒に酒ばかり飲ませていた訳ではなく、テキストなど教材製作、講義後の質問への指導、山登りや海釣りなど塾内イベントの準備もしました。仕事のノウハウや目上の人との接し方は、この時たたく込まれたとって過言ではありません。

その後は、94年に予備校講師の参議院選挙にスタッフとして巻き込まれたり、一時は何もかもが嫌になって名古屋駅西のフリー雀荘やパチンコ店に入り浸りになったことも。このような生活に見かね、文学部の1年先輩の女性が自分の勤める出版社「風媒社」（名古屋市）にアルバイトで誘ってくれたのが96年5月でした。

約10カ月のアルバイトの後、6年経っても卒業できない大学を辞めようと思っていました。その出版社に潜り込もうと思っていたところ、「とにかく大学だけは出ろ」という両親の温かい奨めもあり、97年春に復学。大学4年目に旧教養部の単位はクリアしていましたが、専門では1年時にとった応化序論の2単位だけ。教官や職員には「1年間で60単位以上とらなければ研究室には配属しません」と、暗に「卒業は無理だよ」とほめかされました。

その時25歳。当初は6年ぶりの授業で調子も上がらず、年下の「同級生」には「何だ、あの太った年寄りは」と不審がられました。「戻ったからには卒業しないと格好悪い」と講義に出続けました。7年目の大学生活となった97年はレポートを100本くらい書きました。指導教官だった松田勇教授の励ましもあり、1年間で83単位を取得し、無事に原口研究室に配属。就職試験で出版社や新聞

社を受けまくり、奇妙な今の会社が拾ってくれました。

大学時代の話が長くなりましたが、自分の根幹に関わることなので記しました。行き当たりばったりのような大学8年間の経験は、人の喜怒哀楽と世の中の森羅万象を描くべき新聞記者生活に、しっかりと息づいています。普通に4年間を過ごしていたら、自分の性格からして霞ヶ関の官僚のように、ものすごく傲慢な人間になっていたでしょう。学内はもとより、学生時代から通っている名古屋市千種区今池の飲屋街の親父やママさんから、教えられたことがたくさんあります。

会社では99年から4年間、長野で地方の街ダネを書く記者をしていました。取材エリアに信州大農学部があり、取材をする上で科学の知識が生きました。また、新聞のサイエンスの関する記事の不確かさも実感しました（笑）

今年で35歳になります。すでに退官された柘植新先生には「35歳くらいが自分の専門性を見極め、それに邁進する年齢だ」と学生時代にいわれました。その時は「なぜ35歳か」と思いましたが、今はそれを実感しています。大学2年目に感じた「物書きになりたいが、書くものを貯め込んでいない」という思いが、様々な経験を経て解消されたからです。

社会的なマイノリティー（少数派）の代弁者であるのが記者だと考えます。それは、高校中退生や、在日コリアンをはじめとする在住外国人など社会的弱者はもとより、学問を探究する研究者も対象となります。

例えば修士、博士とも大学院生は増えましたが、仕事として研究を志す人間の受け皿が十分ではありません。これでは学究の徒になろうという優秀な人材が他の分野に流出してしまいます。今の社会状況を分析し、自分なりの切り口で読者に投げかけていくのが新聞の役目だと考えます。

最後に水俣病の患者が、発覚当時にボランティアの学生に投げかけた言葉を記します。公害病であるはずなのに、なかなか水俣病と認定してくれない国に対する憤りの言葉です。これは記者たる自分にも当てはまります。「優秀な科学者である前に正直な人間であってくれ」



寺本和子さん

1972年名古屋大学農学部林学科卒業後、1973年建設省（現国土交通省）入省、富士砂防工事事務所所長を経て、1997年土木研究所環境技術総括研究官。1998年豊橋市助役となり、2001年より豊橋創造大学短期大学部教授に就任し、現在にいたる。NPO 法人朝倉川育水フォーラム理事長、NPO 法人東三河自然観察会理事、とよはし市電を愛する会元会長など市民活動に多数参加。現在、豊橋市環境審議会委員、愛知県森林審議会委員他委員在任中。

「自然」との関わりを保ちながら歩む

■自然に囲まれたいくつかの地方都市に住む

正直言ってまじめとは言えない学生時代を過ごした私は、1年間の就職浪人時代を経て1973年に成績証明書の提出を必要としない公務員試験を受け、幸い砂防職として建設省（現国土交通省）に就職することができた。最初の6年間の勤務地は東京であり、自然に関わる仕事をしたいと思って農学部林学科を卒業したのに、なぜこのような大都会に住む羽目になったのかと嘆いていた。

しかし、心配は無用であった。建設省では多くの職員が数年に一度は転勤することが普通であり、私も7年目からは日光、甲府、富士宮と、すばらしい自然に周囲を取り巻かれた地方都市に住むこととなった。すでに結婚していた私は、夫を残し、二人の子供を連れて移動した。保育園の入園手続きなど大変なこともあったが、新しい土地への好奇心の方が勝っていた。転勤した先々では休日となるたびに、帰省した？夫と子供と共にあちらこちらを歩き回ってその土地の自然を満喫した。

■建設省の「自然保護」に対する見方の変化

このように私生活は大変快適なものだったが、仕事では矛盾を感じて悩ましいこともたびたびあった。たとえば山を治める砂防工事のための工事用道路が、山を崩しているのを見た。当時の建設省には「自然保護」を唱える者は異端児扱いされるような雰囲気があり、自然保護団体などには近づかない方が良く考えられていた。私は気休めに、建設省の研究発表会を利用して道路で

はなくヘリコプターによる物資輸送を提案したりして気を紛らわせていた。

しかし、自然保護を訴えたり環境を大切に考えている人々の声は次第に大きくなり、建設省の考え方も1990年代ごろから徐々に変わって行き、今ではいろいろな建設事業の目的に「環境」が付け加えられるまでになった。大変な変わりようである。建設省にはもちろん私以外にも自然大好き人間が多くいた。彼らも矛盾を感じていたに違いない。精神衛生上からも良い時代になった。

とはいえ、まだダム建設などいろいろなケースで自然保護と開発がぶつかりあうことが続いている。人が生きてゆく上で自然に影響を及ぼさないわけには行かない。問題になるのは、その程度問題である。どのような問題でも、100%善であったり、100%悪であることはまれである。何を優先させるのか？どのような価値観を持つ人がその時多いのかが選択に関わってくる。他人の価値観に耳を傾ける余裕も必要である。その上でもゆるぎないものであれば、自分の信念を主張すれば良い。

■富士山の砂防事務所長に昇進

過去の勤務地の中で最も思い出深い所は富士宮である。ここでは主に富士山の「大沢崩れ」からの流出土砂による被害を防ぐための工事が行われている。もちろん、国立公園である富士山の自然はすばらしい。それに加えて、職場の仲間との楽しい交流が忘れられない。

私は女性初の事務所長ということでマスコミにも取り上げられ、ちょっと照れくさい思いをした。私自身、自分は女性であり、多分事務所長にはならないだろうと思いつ



富士山の大沢崩れからの土砂を受け止める遊砂地が整備されている。

んでいたの、上司の思い切った人事には驚いた。しかし事務所の人々は頼りなさそうな所長を快く迎え支えてくれ、結果、楽しく立派に？職務を果たすことができた。

もし、女性の扱いに迷っている人事担当の方がいらっしゃれば、思い切って女性を抜擢してみしてほしい。本人も最初はびっくりするかもしれないが、のびのびと力を発揮することも大いにあり得る。

なお、富士山は自然保護上の重要地点であり、ヘリコプターによる工事用物資輸送も行われていた。

■豊橋市ってどんな所？

国土交通省から派遣されて、公務員時代最後の3年間を豊橋市と言う地方行政に携われたことは幸いだっただ。 「ゆりかごから」ならぬ「生まれる前から墓場まで」の幅広い仕事を垣間見ることができた。また、「市民」とはいかなる人たちなのか（良い意味も、ありがたくない意味も含め）を理解することができた。

そして特に幸いだっただことは仕事を通して多くの市民の方々と交流でき、その中から今も遊んでもらえる？多くの友人を得ることができたことである。そのことは、私をこの地に残ることを決心させる大きな理由だっただ。そして、もう一つの理由は、豊橋市には自然が、海も、山も、川も身近にあるということである。思い立って車を走らせれば、30分もせずに太平洋の荒波を見ることができる。そして、10分もかからずに郊外の山歩きを楽しむことができる。

■ボランティア活動

豊橋の友人たちの多くとはボランティア活動を通して知り合った。今、特に深く関わっているのは「NPO 法人 東三河自然観察会」というグループで、豊橋を中心として、田原、新城、豊川などで自然観察会を主催している。

また、ひょんなことから理事長まで務めることとなった「NPO 法人 朝倉川育水フォーラム」は豊橋市の代表的な都市河川である朝倉川（9km弱）に毎年1000人以上が出て一斉にゴミ拾いをするので有名である。会員は1200名を超える大所帯で、ゴミ拾い以外にも、川辺に植林したり、自然観察会を開催したり活発に活動している。

また、豊橋市は数少ない路面電車が走る町であり、私は昨年まで「とよはし市電を愛する会」の会長をしていた。

また、まちづくりグループの「+βネットワーク」の会員でもある。その他、所属だけしている団体はもっとある。

ボランティア活動は、友人との交流も含め、私の楽しみであり活力源である。

■大学での仕事と、つきぬ自然への興味

私は、2001年4月に国土交通省を退職し、豊橋創造大学短期大学部に採用され新しい仕事を始めることになった。研究者としては恥ずかしいレベルであり、にわか先生に教えられる学生も災難かもしれないが、一応授業科目としては「生物学」、「地球環境論」などを任されている。

授業をするに当たって、大学でもしたことが無いほどの勉強をした。そして発見したことは「生物学の面白さに脱帽」ということである。ひょっとしたら今後一切触れることが無かったかもしれない生物学の世界に浸ることができたことは私の人生にとって大変な収穫だっただ。

自然観察会も毎回行くたびに生命の営みに関する新しい発見があり、驚きと喜びを感じる。私は後何年生きるができるか分からないが、確信を持って言えることは、尽きぬ自然への興味を持ち続ける限り退屈しないということである。皆さんも是非、自然の面白さに出会っていただきたいと思っている。

こすもす保育園 Nagoya University Cosmos Nursery School

平成18年（2006年）3月、「名古屋大学こすもす保育園」の園舎が完成しました。4月からは大学構成員の子どもたちがこの暖かく安全な保育園で、すくすく育っています。園庭には全学同窓会支援事業により寄贈された赤い屋根の小さなログハウスがあり、今後長きにわたって子どもたちの成長を見守っていくことでしょう。園舎にはどのような工夫や思いが込められているのか、建築を担当した事務局（施設管理部）による文章を、名大トピックスから要約してお伝えします。

In March 2006, the construction of Nagoya University Cosmos Nursery School was completed. Since April, the kids of Nagoya University's staff and students have been enjoying its warm atmosphere and safe environment. NUAL has donated a pretty red-roofed log house which is now situated in the Cosmos play yard. No doubt that this log house will witness the growth and development of many kids. Recently "Meidai Topics" has published an article by the school designers who were NU staff, that described how they have put their hearts and souls into the design. The article is summarized here for this newsletter.



（左）外観西南面（右）園庭（奥のログハウスは全学同窓会から寄贈されたものです。）

「こすもす保育園」は、教職員の福利厚生充実・国際交流推進・学生サービス向上を包含した名古屋大学の「男女共同参画推進事業」のひとつとして建設されたもので、建物は、木造（集成材工法）平屋建て、延べ234.79㎡で、保育定員は30名です。

名古屋大学は、法人化により雇用保険の適用事業主団体となったため、保育園の設置に対し、財団法人21世紀財団より設置費・運営費・保育遊具等購入費の一部を助成する制度を受けられることになりました。これにより、大学の負担を軽減しながら、子どもたちのために最適の施設を新しく設置したいという希望を実現することができました。

設置場所の選定にあたっては、学内各所の候補地を検討した結果、自然環境に恵まれ、騒音や排気ガスなど不利な点が少ない場所を選び、学内の理解を得ながら樹木伐採を最小限におさえる建物の配置を行ないました。

設計に当たっては、暖かみのある建物とするため木造を希望する声に関係者に多かったため、木造を中心とした各種工法を、基本性能とコストの面から検討しました。その際、平嶋義彦生命農学研究科教授のご助言をいただき、建物の主要な構造部材に集成材を使用し、構造計算により地震などの自然災害に対する建物の安全性を確保する工法（SE構法）を採用することとしました。SE構法により、在来工法の木造では不可能だった、大空間や大開口を実現することが

き、本保育園では高い天井と自然光が十分に差し込む南向きの大きな窓を持つ保育室を造ることができました。

保育室には可動間仕切りを開け、子どもの年齢に対応したフレキシブルな使い方ができるようになっています。全ての保育室に床暖房を採用し、冬は足もとから自然な暖かさの中で過ごすことができ、また、外部には保育室から連続したデッキテラスを設けて広がりのある育児スペースを創出しています。南側のテラスは雨の日でも出入りしやすいように広くし、その屋根の一部をガラス張りにしたことで、冬場には太陽の光が差し込んで室内でひなたぼっこができ、省エネにも役立ちます。仕上げ材の選定にあたっては、木のぬくもりが感じられるとともに、掃除しやすいなどの機能面、シックハウス対応などの性能面、さらにコスト面も考慮し、手の届く範囲の床、壁、デッキテラスには木質系の材料を使用しました。高価な材料を使わずとも、安全で安心な空間とするよう心がけ、自宅にいるような安らぎを感じられるようにしました。

また防犯・安全対策として、オール電化仕様の厨房機器の採用や、モニター付ドアホンを併用した電気錠付門扉、フェンスセンサー、ネットワークカメラの設置、扉の指つめ防止対策、押し棒錠による施錠、段差のない床の設置などを行いました。

「こすもす保育園」の名称は、学内公募により、周籐芳幸文学研究科教授の案が採用されました。親しみやすい花の名前であると同時に、周知のようにギリシャ語で「世界、宇宙」を意味する語であり、この保育園で成長する子どもたちが、名大というマイクロコスモスから世界というマクロコスモスへとはばたくことができるように、また、個人というマイクロコスモスと社会というマクロコスモスとの間でバランスのとれた人格を形成することができるようにとの思いを込めて命名されたものです。（名大トピックス No.157より）

社会科学研究会



私たち社会科学研究会（略して社研）は、理論活動をおこなっているサークルです。週2回部員が集まり、様々な社会問題をとりあげて研究することを通じて、部員一人ひとりが既成の論調にながされない批判精神

を養うことを目指しています。

今年は、一年間の研究テーマを「戦後60年の日本とファシズム なんかな臭い日本の空気」に設定し、現代日本のファシズム性をつかみとる研究活動をおこなっています。たとえば6月には、自民党新憲法法案を検討し、そこに国家の安全と社会の秩序を基本的人権より重視する国家主義思想が貫かれていることをつかみとってきました。また名大祭では、「新しい歴史教科書をつくる会」教科書の「アジア解放戦争史観」を検証する講演会をおこないました。

研究成果は年2回、機関誌『拠点』という形で発表しています。

(2005.11)

写真部

<http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/syasin/index.html>



私たち名大写真部では年に数回行われる写真展を目標にして、個人のペースで写真を撮っています。部全体の活動としては部会を週に一回開いて、次の写真展などの目標について話し合っています。部員はみんな

仲がよく、大学から写真を始めた人も多いです。

部には暗室も設備されていて自分の好きな時間に自由に白黒写真を焼くことができます。

学生会館西隣、第一文化サークル棟で活動しています。

(2006.3)

将棋部



こんにちは、将棋部です。メンバーは30人ほどで、いつも楽しく将棋を指しています。活動日は特に決まっておらず、皆各自の都合のいい曜日、時間帯に部室に来ています。そんな私たちの目標は全国大会で好成績を収めることです。先日中部地区の学生大会(団体戦、個人戦)があり、団体戦で私たちは26大会連続の優勝を果たし全国大会出場を決めました。全国大会では例年苦戦しているので今年こそ上位をめざしたいです。

(2006.7)

馬術部

<http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/bajutu/>



馬術・乗馬と聞くと日本では敷居が高いように思われがちですが、それを大学4年間で体験できるのが、馬術部です。馬に魅かれてきた部員はみな初心者ばかりですが、夏を過ぎるころには一人で馬に乗れるようになっています。馬術の醍醐味はそこから。障害飛越などの競技に参加したり、学生が上がると自分の担当馬ができたり。

この部活では普段の学生生活では味わえない刺激的な経験に出会えること間違いなしです。

4年間、ウマに打ち込みたい人にはぴったりのクラブです。

活動場所：東郷町名大附属農場内馬場

活動時間：授業前の早朝・授業後の夕方（週2回任意）

連絡先：電話0561-38-1612（馬術部厩舎）

(2006.3)

日本拳法部

http://www.geocities.jp/mei_kenn/



名大日本拳法部は約50年の歴史をもつ伝統のある部活です。

日本拳法とは打撃技、関節技、投げ技が可能な総合格闘技であり、上にあるような防具を装着することにより寸止めという枷をはめられることなく、実際に打ち合い、自由に格闘スタイルを構築できる格闘技なのです。

活動は毎週火・水・金の17時から20時、土曜の10時から12時です。

活動は毎週火・水・金の17時から20時、土曜の10時から12時です。

(写真前列左から二人目は中津川研修センターの管理人さんです。)

(2005.11)

男子バスケットボール部

<http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/basketball/>



男子バスケットボール部は夏に開催されるリーグ戦での1部昇格を目標に月・水・木・土の週4回の練習に励んでいます。

大会・遠征では県外のいろいろなところへ行くことができ、また、休みの日には部員で遊びに行くこともあります。

バスケ未経験者でも興味をもった学生や、一度練習に参加してみたい学生には、HPの掲示板に気軽に書き込んでもらいたいと思っています。

(2006.7)

事務局からのお知らせ From the NUAL Office

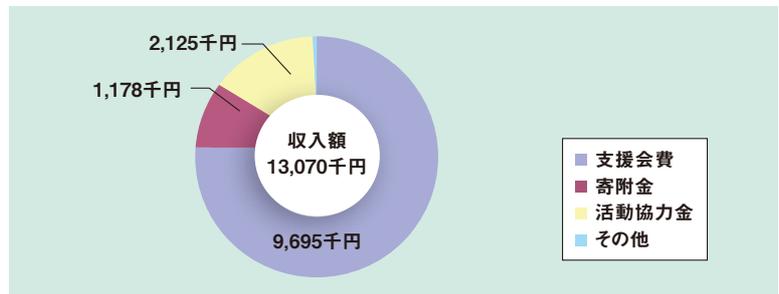
● 支援会費のお願い Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられております。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

○ 主な収入 (総額13,070千円)

(平成17年度実績)

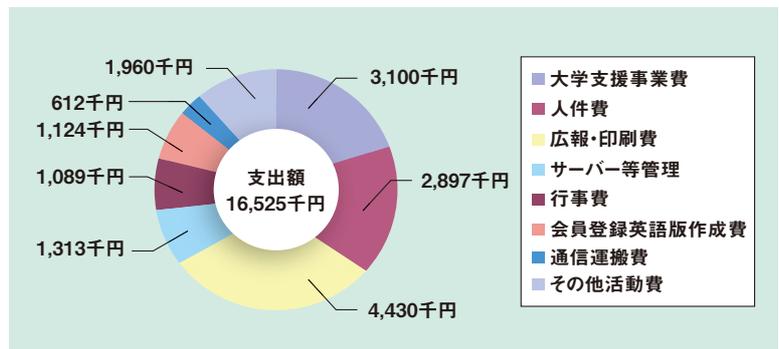
摘要	金額
支援会費	9,695,000
寄附金	1,178,000
活動協力金	2,125,000
その他	72,000
	13,070,000



○ 主な支出 (総額16,525千円)

(平成17年度実績)

摘要	金額
大学支援事業費	3,100,000
人件費	2,897,000
広報印刷費	4,430,000
サーバー等管理	1,313,000
行事費	1,089,000
会員登録英語版作成費	1,124,000
通信運搬費	612,000
その他活動費等	1,960,000
	16,525,000



■ 同窓会ホームページより、会員情報の登録・変更ができます。

You can register your membership and renew your data through the NUAL web-page.

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

得られた個人情報、人材貢献バンクとして全学同窓会および名古屋大学の活動に利用しますが、そのほかの目的に使用したり、本人の承諾なしに公表することはありません。最新の会員情報が得られますよう、皆様のご協力をお願いいたします。

お詫び

平成17年度支援会員名簿に以下の誤りがございました。ここに深くお詫びいたしますとともに、下記のとおり訂正いたします。

お名前	誤	正
野村 昌彦様	旧職員等会員 野村 昌史	法学部 野村 昌彦 S36
経済学部 坪内 坦様	坪内 垣	坪内 坦
経済学部 宮本 憲一様	宮田 憲一	宮本 憲一
医学部 石神 寛通様	石神 寛道	石神 寛通
大谷 肇様	旧職員等会員 大谷 肇	工学部 大谷 肇 S55
国際開発研究科 江崎 光男様	江崎 克男	江崎 光男
名誉教授 高木 弘様	卒年：S 9	卒年：S34

編集後記

特集名大今昔第二回は、どの卒業生にとっても懐かしい学生食堂を取り上げましたが、まだまだ、書ききれないところが多くこのテーマはこれからも継続します。ホームカミングデイにお越しなり、このニュースレターをお読みいただいている会員の方も多いいと思います。様変わりした食堂をのぞいてみてはいかがでしょうか。広報委員会もこの9月でメンバーが入れ替わり、次号からは新しい広報委員による編集になります。これからも、ご愛読をお願いします。(全学同窓会広報委員会)

NUAL Newsletter No.7 平成 18 (2006) 年 9 月発行

Nagoya University Alumni Association

NUAL 名古屋大学全学同窓会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-783-1920

E-mail nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ホームページ <http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

編集：名古屋大学全学同窓会広報委員会